

冒頭のレトリック

柳 沢 浩 哉

The Rhetoric of Introduction

Hiroya YANAGISAWA

1. 問題の所在

新聞の社説には論説の名文という評価が定着しており、入学入試の国語では毎年数十の高校・大学が取り上げている。が、実は、社説は大学入試よりも、レトリックの教材にふさわしい文章である。社説は言うまでもなく、新聞社の意見を書いた文章、すなわち主観的な文章である。良識ある穏やかな文章という一般的なイメージとは裏腹に、実際の社説の中では読者を説得するためのさまざまなレトリックが駆使されており、その中には強引なレトリック、時には虚偽すら見出される。本稿は、社説に現れた虚偽の例から始めてみたい。

次に提示するのは、ある新聞社説の冒頭である。平成八年二月、いわゆるバブル経済の後始末として、金融機関救済のために住専（住宅金融専門会社）の借金返済の一部に公的資金を投入するという政府案が提案された。しかし、この政府案は当時、多くの反発・反論を呼び、大きな政治問題となった。この社説は、政府案に反対の立場から書かれたものである。

(1) 住宅金融専門会社の処理に、根拠もはっきりしないまま、巨額の税金を使うのか。それとも、こんな不合理は許さず、処理策を見直すのか。国会での住専問題の審議が、重大な岐路にさしかかっている。(朝日、1996.2.24)

(1)の第一文は二者択一の形式を取っている。そして、この部分を読む限り、提示された二つの選択肢のうち、選ぶべきものが「処理策を見直す」以外にないことは明らかであるように見える。しかし、その判断には本当に疑う余地がないのだろうか。

(1)には作者の主観的な判断が散りばめられている。(1)を読み直して、どの部分が主観的判断なのかを考えてみよう。注意深く見ると、「根拠もはっきりしないまま」「巨額の」「こんな不合理は許さず」が筆者の主観的判断であることが分かるだろう。こ

れらは、いずれも客観的には決めることのできない判断である。さらに、(1)では「税金」という語が少なからぬ説得効果を生み出しており、この文章をより客観的なものとするには、この「税金」を他の語に改める必要がある。「税金」という言葉のこの当たり前の使い方に、いったいどんな問題があるのだろうか。これは「税金」という言葉の意味を考えることで明らかにできる。「税金」は、われわれが納める段階での金を指す語であり、予算化あるいは執行される段階での金を指す語ではない。たとえば【新明解国語辞典】では「税金」を「租税として納めるお金。」と説明している。確かに、我々が税金として納めた金は、予算化・執行段階では「税金」ではなく、「〇〇予算」「〇〇経費」「〇〇費」などと呼ばれるのが一般的である。もちろん、予算化・執行段階での金に「税金」を使うことも可能であり、【新明解】にも「国民の税金でまかなわれる。」という例文が挙げられている。ただし、「税金」が「金を納める」という部分を特に意識させる語であるため、予算化・執行段階での金に対して使われた「税金」の語は、「自分の納めた金が使われる」という納税者の被害者意識をくすぐる効果を生じさせる。たとえば、「ほとんど車の通らない、この立派な道路は、われわれの税金で作られているのです。」のように。「税金」の語にはこのような効果があるため、国や地方自治体の金の使い方を批判する文章では「税金」の語が好んで使われる。先ほどの【新明解】の例文「国民の税金でまかなわれる。」にも、納税者の被害者意識をくすぐる効果を感じることができるだろう。(1)は予算化の段階での議論であるから、ここで「税金」という語を使えば、それだけで、予算案に対してマイナスの印象を与えることができる。ここでは、「税金」ではなく、「公的資金」という、やや聞きなれない言葉を使った方が、中立的である。

ここまでの考察をふまえて、(1)から主観的判断を取り除き、さらに「税金」を「公的資金」に置き換えてみると、次のようになる。

(2) 住宅金融専門会社の処理に、公的資金を使うのか。それとも、処理策を見直すのか。

(1)では選ぶべき選択肢が明らかであったが、これを(2)のように書き換えた瞬間、二つの選択肢は対等になってしまい、どちらを選ぶべきか分からなくなる。(1)は、本来対等であるはずの二つの選択肢を、あえて一方だけがよく見えるように提示して、読者の答えを誘導していたのである。これは「虚偽二者択一」(fallacy of false dilemma)と呼ばれる、虚偽論においてはよく知られた虚偽である。「虚偽二者択一」は、選ぶべき選択肢が既に決められているにもかかわらず、読者に答えを選ばせる形を取っているために、読者は自分の判断によってその答えを選んだと錯覚してしまう。答えを強制されたにもかかわらず、読者がその答えに納得し、確信してしまうところに「虚偽二者択一」の強力な説得力がある。なお、「虚偽二者択一」については、文献1(1, 47-56)を参照して欲しい。

社説には良い文章の典型というイメージがあるから、社説に虚偽の含まれている事実ショックを受けた読者も多いかもしれない。ただし、本稿の目的は社説の批判ではなく、導入部の技法である。本稿では、虚偽が文章の冒頭において犯されている点に注目したい。誤解を恐れずに言えば、文章構成上の定石に従った結果、ここでは虚偽が犯されたのである。導入部は、文章を読んでもらえるか、あるいは弁論に耳を傾けてもらえるかを決定する重要な個所であり、レトリックでは文章の導入部に要求される課題、さらにその課題に応じるための方法が研究されてきた。それでは、導入に要求される課題とは、どのようなものなのか。さらに、先ほどの社説に虚偽を犯させた定石とはどのようなものなのか。本稿では、導入での課題と方法を概説した後、いくつかの実例によって、文章の導入部を分析してみたい。

2. 導入部の課題と方法

日本語で書かれた本の中には、残念ながら、修辞学の観点から文章の導入について詳しい説明を行っている文献は見あたらない。本稿では、アメリカの大学の教科書として定評のある、コーベットの『現代学生のための古典修辞学』(2, pp.303-312)と、コーベットの元本である、19世紀のイギリスの修辞学者ホエトリの『レトリック原論』(3, pp.170-172)

を使って、文章の導入について説明してみたい。コーベットは、文章の導入に要求される課題として次の三つを挙げている。

- (ア) 聴衆に文章の目的を教える。
- (イ) われわれの話すことを受け入れたい気にさせる。
- (ウ) 聴衆に気に入られ、信頼を得る。

単純ではあるが、導入に要求される課題はこの三つにほぼ集約できそうである。そして、コーベットは、この中の特に(イ)を実行する方法として、ホエトリの示した導入の五つの型を紹介している。その項目と簡単な説明を示してみよう。

(A) 詮索好き導入

これから述べる内容が、重要、あるいは興味深いということを示して興味をかき立てる。「歴史は繰り返すのだろうか?」のような、問いで始まる導入がその典型。

(B) 逆説的導入

内容が逆説的である場合には、これからの話が逆説的な内容であることを予告する。

(C) 矯正的導入

これからの話が一般に認められていないものである場合に、その考えが、これまで否定、誤解、曲解されてきたことを最初に述べて、読者の抵抗感を軽減しておく。

(D) 予備的導入

話の進め方が普通とは違う時に、文章の欠点を先に示して、読者の抵抗を起こりにくくしておく。たとえば、話の進め方が普通とは違う、多少足りない部分があることなどを明言しておく。

(E) 物語的導入

逸話から始めることで、主題に対する興味を喚起する。

(C)(D)は、自分の立場が不利であると思われる時、すなわち、聴衆が簡単には受け入れてくれないと予想される時、あるいは、自分の話と違和感を感じるだろうと予想されると時に、障壁を取り除いておく

ための方法である。そして、これらは一つだけを選ぶのではなく、いくつかを組み合わせることも可能である。また、ホエートリーは、導入において感情の刺激（パトス）がしばしば行われること、その中では聴衆の賞讃が最も一般的であることも指摘している。それでは、ここで、本章の冒頭に示した虚偽の問題を考えてみよう。まず、(1)は(A)～(E)の内のどれに当たるのだろうか。問いで始まるという形式、さらに「国会での住専問題の審議が、重大な岐路にさしかかっている。」によって問題の重要性を示している点で、「詮索好き導入」に当たりそうであるが、興味をかき立てる導入とまでは言えないようである。そして何より、「詮索好き」という観点だけでは、ここで虚偽の犯された理由を説明することはできない。

結論を言えば、あの虚偽は(ウ)の課題から説明される。(ウ)で述べているのは信頼の獲得、すなわちエトスへの配慮である。聴衆から信頼を獲得するために必要となる材料としては、話者の知性・経験・道徳性などのアピールが思い浮かぶ。が、どうしてここに虚偽がからんでくるのだろうか。虚偽は、少なくとも道徳性にはマイナス要因として働くはずであり、むしろ信頼を失わせる結果を招くのではないか。ここで(ウ)をもう一度確認してみよう。(ウ)では信頼とともに、「聴衆に気に入られ」ることを挙げている。一見、当たり前のように見えるコメントであるが、実際の弁論の場面では、「聴衆に気に入られ」ることが大きな重みを持つ。気に入らない話者の話など、信用する気にも、真面目に聞く気にもならないからである。そこまで極端でない場合でも、聴衆に気に入られなくては、弁論の効果は大きく削がれてしまうだろう。そして、この時、話者が最も警戒すべき要素は、聴衆が話者に対して持っている先入観である。先入観は、たとえば、話者が属している集団、話者の立場や身分などから簡単に作られてしまうと同時に、弁論への抵抗として強く作用するからである。そのため話者は、自分が何らかの先入観を持たれていると予想される場合には、弁論の最初にその先入観を取り除いておかななくてはならない。もちろん、書き言葉の場合でもこれは同様である。ただし、先入観には取り除く以外に、もう一つの対処法がある。それは先入観を積極的に利用し、これから批判・反論しようとする相手に先入観を植え付け、相手の印象をひきずり下ろしてしまう方法である。言うまでもなく、これは弁論の追い風とな

る。そして、論敵にマイナスの先入観を与えることは、その分だけ、ライバルよりも自分を良く見せることになるから、これも(ウ)の中に含めることができる。(ウ)の課題には、信頼されることの他に、先入観を取り除くこと、論敵に先入観を植え付けることが含まれるのである。それでは、先ほどの問題に戻ろう。(1)に虚偽の現れた理由は、もう明らかだろう。あの虚偽はこれから批判しようとしている政府案にマイナスの先入観を植え付け、自説を有利に進めるためのものだったのである。

ここで参考として、(1)の類例を挙げてみよう。社説では読者を説得するためのさまざまな方法が使われている。冒頭において読者に先入観を与える例は、多いとまでは言えないが、その気になって新聞の縮刷版を探していけば、必ず見つけることができる。2000年に少年法改正案の問題を論じた社説から、そのような例を拾ってみよう。引用したのはいずれも社説の冒頭部分である。

(3) これまで何度となく話し合われてきた問題である。その蓄積を生かし、法の目的や、現に果たしている役割を踏まえた冷静な議論が、なぜできないのだろう。(朝日、2000.5.18)

(4) いくら総選挙が近づいているとはいえ、この右往左往は見苦しい。

少年法改正をめぐる、ここ数日の自民党の迷走は、永田町政治の危うさを映し出した。(朝日、2000.4.21)

いずれも、主観的な断定を冒頭に示すことで読者に先入観を与えようとしている。次も少年法を扱った社説の冒頭である。

(5) 果たして明日を担う子どもたちのためになるのか。与党3党が国会に提出した少年法改正案。刑事罰の対象年齢の下限を16歳から14歳に引き下げ、殺人などの罪を犯した16歳以上の少年は原則として刑事裁判を受けさせようとするものだが、少年事件の専門家からは効果を疑う声が相次いでいる。(毎日、2000.10.16)

(5)では(1)とよく似た手法が使われているので少し説明を加えておきたい。(5)では第一文を疑問文とすることが効果的に機能している。この第一文がも

し「(これでは)明日を担う子どもたちのために(は)ならない。」という平叙文であったら、この判断は、少なからず主観的な印象を与えるものとなるだろう。この問い「果たして明日を担う子どもたちのためになるのか。」は、答えを必ず「ならない」(否定)にするから、これは反語、あるいは修辞疑問である。つまり、答えは必ず「ならない」となるように仕組まれているのであるが、読者に問いかける形を取っているために、読者は答えを強制された事実気付かず、その答えを自分のものとして納得してしまう。(1)と全く同様の形での、巧みな先入観の植付けである。

ここまで検討してきた、導入部のポイントを整理すると、次のようになるだろう。

- 要約 (内容の予告)
- 興味 (興味をかき立てる)
- 抵抗感 (予想される抵抗をあらかじめ除いておく)
- 偏見・好意 (自分の偏見を除く、論敵に偏見を与える、気に入られる)
- 信頼 (聴衆の信頼を得る)

これらはもともと文章を作る際のポイントであるが、文章を分析する観点としても有効である。次節に、これらを使った分析の実例を挙げてみよう。

3. 導入の実例

新書本の冒頭を例に文章の導入の実例を見てみよう。そこでは、読者をひきつけるためにどんな手法が使われているのだろうか。

- (6) 一つの国の運命が、既にその地名の中に予言されていることがある。

東ヨーロッパの中央部に位置するポーランドとは、古スラブ語で「平らな土地」を意味する。それは平和時であれば、農耕に適した平坦な土地を表す地名にすぎないのかもしれない。しかしヨーロッパのように、いくつもの国と国とが国境をせめぎあう世界にあっては、「平らな土地」とは、その国がどこからでも侵入しうる地政学的地点に置かれていることを意味する。

(21世紀研究会編 『地名の世界地図』(文春文庫, 2001)「はじめに」)

これは、ポーランドという例から始めた「物語的導入」であるが、謎めいた第一文は読者の興味をかき立てる。この点で、「物語的導入」であると同時に「詮索好き導入」でもある。そして何より、この冒頭が本文の内容を巧みに紹介している点で、見事な導入と言えるだろう。

- (7) さて、今日から、「論文の書き方」という題目の連続講義を行います。

ところで、この「論文の書き方」という題目のようですが、まず、これにはちょっと注釈をつけてみたいと思います。

というのは、これからお話ししようと思っているのは、かならずしも、きっちりとした論文を書くための方法のことではないからです。

私がこの本で論じたいと思っているのも、それはむしろ、次のようなことです。すなわち、私たちが日々の生活を送っている場、学生だったら学校、働いている人だったら職場、家庭にいる人だったら家庭というように、それぞれの日常の場において、自分が生きていくことが少しでも楽しくなるようにするにはどうしたらいいか、その工夫に役立つ論理的な思考法を考えてみようというのです。(鹿島茂『勝つための論文の書き方』文春文庫, 2003)

(7)は、この本で扱う内容が「論文の書き方」という言葉で一般にイメージされるものとは違うということ述べているから「予備的導入」に当たる。普通「予備的導入」は、文章の内容・進め方に読者が違和感を感じると思われる時、あらかじめ抵抗感を弱めておくために使うのであるが、(7)で述べられているのは、この本から予想以上の収穫が得られますという、読者に期待を持たせる内容である。ここでは、抵抗感とは別な、ある特殊な効果を期待して「予備的導入」が選ばれている。(7)では、この本が「生きていくことが少しでも楽しくなる」ための、論理的な思考法を教えてくれることを予告している。穏やかな言葉が選ばれてはいるが、生きていくことを楽にしてくれる思考法とは、考えてみれば究極の思考法ではないか。一步間違えば嫌味になるほどの強い自信が、ここでは表明されている。「予備的導入」は読者に弁明する形をとるから、この型を使うと必然的に筆者の印象は謙虚なものとなる。(7)では「予備的導入」のこの性質を利用することで作者

の謙虚さを印象付け、「偉そうだ」という反発を受けない工夫がされているのである。さらに(7)では、穏やかな言葉の選び方のレベルにおいても、謙虚な印象を与えるための工夫が見出せる。

文章の冒頭には、レトリックの練習問題に最適であり、修辞学教育というものを考える場合、入門的な素材を提供してくれる。また、修辞学教育は、中学高校でも十分に可能であり、「生きていく」上で有効な知識・能力を与えてくれるはずである。

参考文献

香西秀信(2002)『「論理戦」に勝つ技術』, PHP 研究所

Edward P.J. Corbett (1971), *Classical Rhetoric for the Modern Student* (2th), New York(Oxford University Press)

Richard Whately, *Elements of Rhetoric* (1828), (Edited by Douglas Ehninger, 1963, Southern Illinois University Press)